



社会学であればテーマは自由 学生の着眼点をいかに、社会問題をトコトン追求する

総合科学部 准教授 渡邊 克典 (わたなべ かつのり)



アンケート調査用の資料。昨年度は難病について調査するため、600部も発送したそう。

「論文の読み方」から始める 卒業論文の作り方

社会学で卒業論文を作成する総合科学部の学生を対象とした地域総合演習Ⅰ、Ⅱ。

地域総合演習Ⅰは3年生、Ⅱは4年生が履修します。

渡邊先生の専門が福祉や医療に関する社会学なので、まずは福祉や医療に関する社会学の論文を読み、専門的な文章がどういうものか、読み方、書き方に慣れるところから始まります。

3年生後期になると学生自身が選択したテーマに添って専門的な論文精読へと進むのですが、各自が選択したテーマを見せてもらうと全員バラバラ！

「社会学」と一口にいつても民族社会学や地域社会学などに分かれるのですが、渡邊ゼミは「社会学であればテーマは自由」というのが特長です。

テーマは違っても 全員一緒に成長する

授業は事前にまとめたレポートに沿って一人ずつ、発表します。取材日は3年生の山田朝未さんが松田茂樹著「少子化対策における家族社会学の貢献と今後の課題」を読み、少子化対策や子育て支援に関する疑問や問題点について発表していました。

発表が終わると、論文に登場した用語の確認を行います。

「テーマは違っても社会学という点ではある程度共通点はあるのですが、専門用語や耳馴染みのない言葉も出てきます。他の学生からの質問を受けて、発表者が説明するのですが、自分の言葉で説明することで、卒業でもその言葉を使えるようにしてもらいたい」と、渡邊先生。

他の人の研究にも関心を持つ



発表を行った山田さん。少子化の原因は子育て支援の不足と考えていたそうですが、今回の論文を通して支援策の偏りにも気付いたそうです。

ち、能動的に授業に参加できるよう、1人1回以上質問することを徹底しているのですが、1回と云わず、たくさん意見が飛び交い、活気がありました。

学生たちの興味から 社会の「今」が見えてくる

少子化や子育て支援に関心があるという山田さんは、「もともと子供が好きで、今、問題になって



2020年4月に着任した渡邊先生。これまでの卒業論文も一つとして同じテーマがないので、「同じテーマはダメですか？」と訊くと、「その時は前の人より面白くしてもらったらOKです(笑)」。…ハードルが上がるようです。

いる少子化について考えていきたいと思いますようにになりました。将来、福祉や子育て支援に関わる仕事に就き、大学で学んだことをいかしたい」とこのテーマを選んだそう。この日の発表は山田さんだけでしたが、他のゼミ生がどんなテーマで取り組んでいるか、紹介します。※以下敬称略 取材日は1名欠席

瀬戸内国際芸術祭に供給される 無償の労働について

(4年 武田 彩花)

自主的にアートに関わることで、芸術的活動への意欲を高めるといふ論文をもとに、瀬戸内国際芸術祭に参加したボランティアに「活動を通じてアートに興味をもったか」などについてヒアリングし、芸術祭開催の意義やアートの役割について考察する。

スクールソーシャルワーカーにおける ヤングケアラーの認識

(4年 雷田 みあり)

ヤングケアラーの問題解決の糸口は学校にあると考え、5年前、徳島県にも導入されたスクールソーシャルワーカーに着目。心理相談業務も行うソーシャルワーカーがどの程度、ヤングケアラーについて把握しているか、スクールソーシャルワーカー協会の協力を得て調査中。

障害のない社会 図書館における バリアフリー

(4年 田窪 莉子)

歩行が困難な人は車椅子を使うことで移動が可能になるが、目が見えない人のための点字ブロックが車椅子の障害になるなど、障害のある人のための設備や道具がぶつかりあう状況を改善するにはどうすればいいか、バリアフリーに取り組む図書館に取材し、検討中。

認知症介護、家族介護

(3年 館野 真衣)

認知症介護などに関わる家族会についても調べ、介護の実態を把握するため準備中。リサーチエンスジョンについても検討している。

セクシャルマイノリティと スクールカウンセラー

(3年 原優香)

セクシャルマイノリティに関する配慮は徐々に広まってきているが、性に関して悩む子どもは少なくない。養護教諭やスクールカウンセラーの連携等により、LGBTQの子ども達が過ごしやすい環境をつくるにはどうすればいいかを考える。

聴覚障害者とのコミュニケーション、 手話

(3年 佐藤 結香)

手話が得意な友人と出合いを

きっかけに、聾者が使う日本手話は聴者が使う日本語とイコールではないと知り、聾者と聴者のコミュニケーションで生じるニュアンスの違いに着目。双方の快適なコミュニケーションの場としてSNSが注目されているそう。

LGBT、コミュニティとしての 居場所

(3年 梁木 登代)

渋谷区では同性パートナーシップ制度があったり、新宿2丁目はLGBTQタウンとしての認知度も高いが、都会と地方では格差がある。地方に住むマイノリティの人たちはどのようにコミュニティを形成しているか、同性婚についても調査したい。

4年生になると関係各所へのヒアリングやアンケート調査なども実施。社会学と人類学系教員S人が学生をサポートし、5月と11月には合同の「卒論中間発表会」も行っていきます。

今、まさに進行している社会問題を自身の興味や関心から独自の視点で捉え、研究に取り組む学生たち。コツコツ論文を読む時間も楽しいと言っていたことが印象的でした。